

社会

◆概要◆

昨年度と同じく大設問7題の構成です。問題の総ページ数は14ページ、小設問数(採点単位)は34題で、いずれも昨年度と同じでした。各分野の配点(分野融合は配点を折半/[]内は昨年度)は、地理分野が33.5点[30.5点]、歴史分野が34.5点[35.5点]、公民分野が32点[34点]でした。中学校3年間で各分野に配当された単位数にほぼ沿った配点となっていました。

2022年度から、すべての出題がマークシート解答形式で記述解答形式がなくなっています。本年度の全体的な難易度は、昨年度に比べてやや易化したと予測されます。例年どおり、単純に用語(知識)を問う出題は少なく、単なる暗記でなく正しい理解を前提としていることや、複数の資料やメモ等を読解して情報を処理し、それらを活用して解答することを特徴としています。また、昨年度に比べて、全体的に文字数が増えており、解答に時間がかかると考えられます。

◆大設問ごとの出題傾向と難度◆

- 問1：昨年度は略地図がリードになっていましたが、資料を含むレポートがリードになりました。(エ)EU、ASEAN、AUについて、議会や関税の有無を解答する問題で、リードのレポートや設問中のメモから情報を正確に読み取る力を必要としました。(オ)日本の首相の外国訪問回数を示した資料に関する出題で、安全保障理事会の常任理事国についての知識が求められ、また、資料に直接示されていない数値を、資料に示された数値をもとに求める必要があったので、戸惑った受験生が多かったと思われます。
- 問2：例年どおり資料や地形に関する図をリードとする形式でした。昨年度に比べて、資料の文字数が多くなっています。(イ)神戸市に関する出題で、(i)(ii)ともに、知識だけでは文章の正誤を判断できず、リードの資料や図に示されている情報を活用する必要がありました。資料を読み解くのに時間がかかった受験生が多かったと思われます。
- 問3：2023年度から、資料を含むレポートをリードとする形式に変わりました。設問の出題形式は例年見られるものが多く、受験生は取り組みやすかったと思われます。(エ)は世界史からの出題でした。(オ)は3枚のカードを説明した文の正誤を判断する問題で、リードのレポートに書かれている用語との関連についても考える必要がありました。
- 問4：昨年度と同様にレポートと、関連する資料がリードになっていますが、資料は戦後の日本の経済成長率と一人あたり国内総生産の推移を示したグラフでした。(エ)リードのグラフに関する出題で、選択肢の内容は、グラフの読み取りに関するもののほか、グラフの動きに関連する歴史的なできごとにもふれたものもあり、それらのできごとがおこった時期についての知識が求められました。
- 問5：「税」をテーマとするメモをリードに、経済分野から出題されました。(ウ)国債が政府の借金であることだけでなく、利子や返済についても問われており、国債に関する広い知識が必要でした。(エ)示されている2つの資料と、それらの資料に関する会話文を読み解く形式でした。(i)(ii)の難易度はそれほど高くありませんが、例年になく出題形式だったので、難しく感じた受験生もいたと思われます。
- 問6：「意見の反映のされ方」をテーマに、おもに現代社会分野と政治分野から出題されました。(ア)決定するための方法についての出題で、アンケート結果と各生徒の意見を正確に読み取って解答する必要がありました。(エ)表に示された情報の種類が多く、解答に必要な情報を見つけにくいと感じた受験生が多かったと思われます。情報を正確に把握した上で計算する必要があるため、難易度が高いと思われます。
- 問7：「国際的な経済格差などの問題」をテーマに、地理・歴史・公民の各分野から出題されました。(エ)4つの資料を読み取って、4つの文の中から2つの正しい文を選ぶ出題でした。資料を丁寧に読み取っていけば、4つの文のうち誤りであるものに気づきやすく、十分正解できる問題でした。